関宿城今昔物語

江戸の流通と防衛の要 関宿城の歴史をたどる

利根川と江戸川の分流点である関宿には、かつて江戸の外城のひとつ「関宿城」がそびえ、江戸幕府にとって水運の要衝、軍事戦略の重要な拠点でした。歴代の藩主に有力な譜代大名を配したことからも、幕府がこの城をいかに重視していたかがうかがえます。河川交通の中心地として繁栄するなかで、水害防衛と新田開発を目的とした治水工事も行われ、城はその地盤をより堅固なものとしていきました。長禄元（1457）年中世関宿城の築城から明治5（1872）年の廃城まで約400年にわたる関宿城の変遷を、当時と今を重ねつつ辿ってみました。

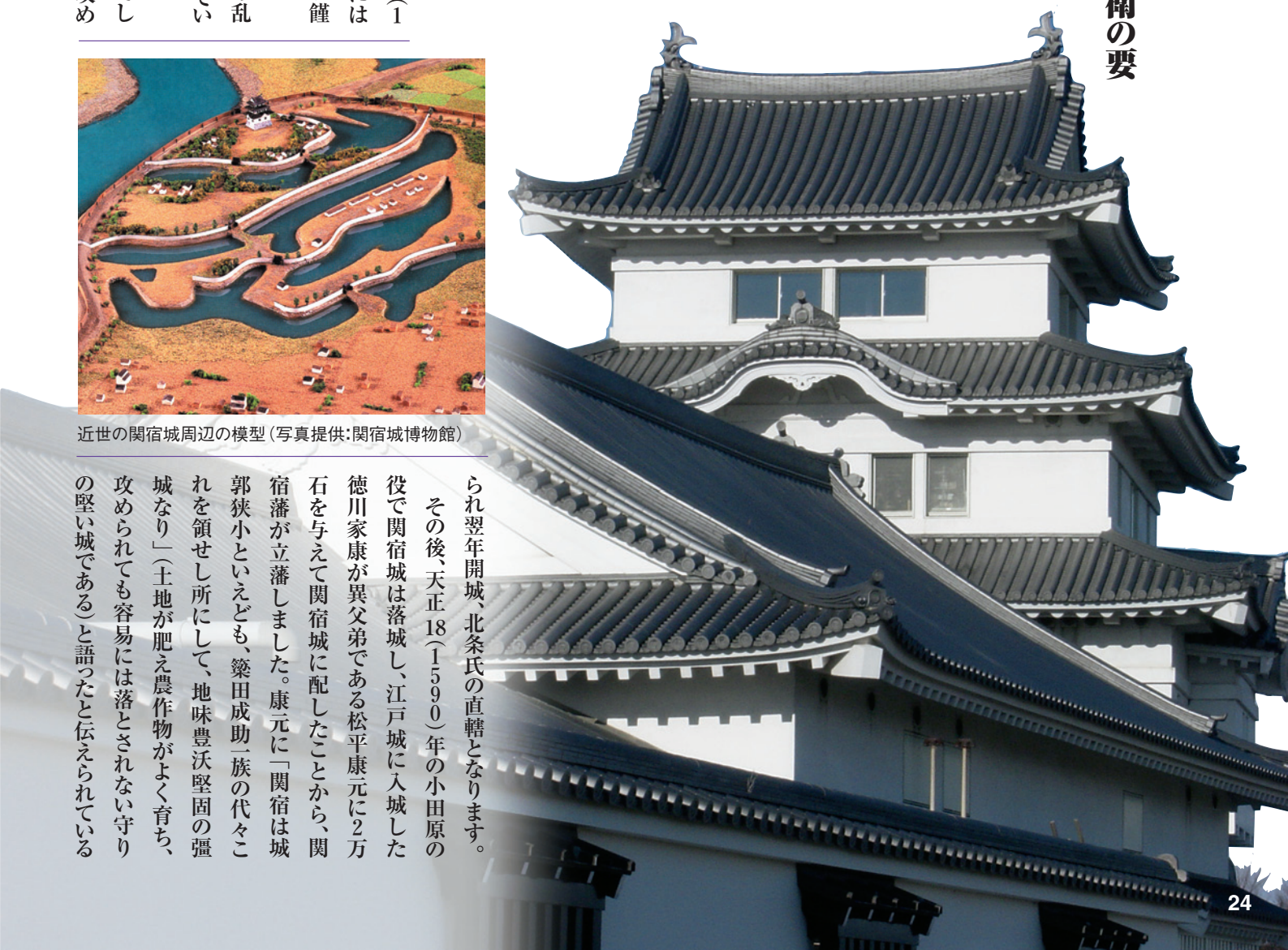
築城と関宿藩の立藩

関宿城は、長禄元（1457）年、古河公方足利成氏の命によって重臣であった簗田成助が水海城（現在の茨城県古河市）から関宿に移り築城したと伝えられています（場所は不明）。

この年は扇谷上杉氏の家臣である太田道灌が江戸城を築城、翌々年の長禄3（1459）年から寛正2年（1461）年には旱魃や水害などにより、国の全域で飢饉に見舞われました。

また、応仁元（1467）年には応仁の乱が起こり、世の中は戦国時代へと流れていきます。

成助以降、関宿城は簗田氏の居城でしたが、天正元（1573）年に北条氏に攻められ翌年開城、北条氏の直轄となります。

その後、天正18（1590）年の小田原の役で関宿城は落城し、江戸城に入城した徳川家康が異父弟である松平康元に2万石を与えて関宿城に配したことから、関宿藩が立藩しました。康元に「関宿は城郭狭小といえども、簗田成助一族の代々これを領せし所にして、地味豊沃堅固の彊城なり」（土地が肥え農作物がよく育ち、攻められても容易には落とされない守りの堅い城である）と語ったと伝えられている

近世の関宿城周辺の模型（写真提供：関宿城博物館）